

石垣島四力村の豊年祭

石垣市字新川二五二番地にある真乙姥御嶽(マイツバーオン)は、山陽姓大宗宮良親雲上長光(一五八四丁一六六一年)の祖先、那礼当の妹・真乙姥の墓が、のちに「お願所」として崇敬の対象とされるようになったものである。

真乙姥は現在の字新川のピロースク(美良底)遺跡一帯に住んでいたが、一五〇〇年「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」のときに字登野城の美崎山にこもり、断食をして琉球王国の凱旋を祈願、衰弱したところを平得村の多田屋オナリに救助された。そのため、乱の鎮定に功があったとし、琉球王国から八重山の司を統率する大阿母職(ホールザー)を仰せ付けられたが、多田屋オナリに譲り、自身は永良比金(イラビンガニ)の神職を授けられている。

八重山蔵元時代に、大阿母になった人々の字新川出身者は次の通りである。初代の多田屋オナリ、二代の伊那千代、六代の比呂真、八代の真比を除いて、ほとんどが字新川の真乙姥御嶽一帯や慶田盛村などの出身者である。

出生地・嫁ぎ先名の村名が現在の字新川出身者と確定している大阿母を上げると次の通りである。



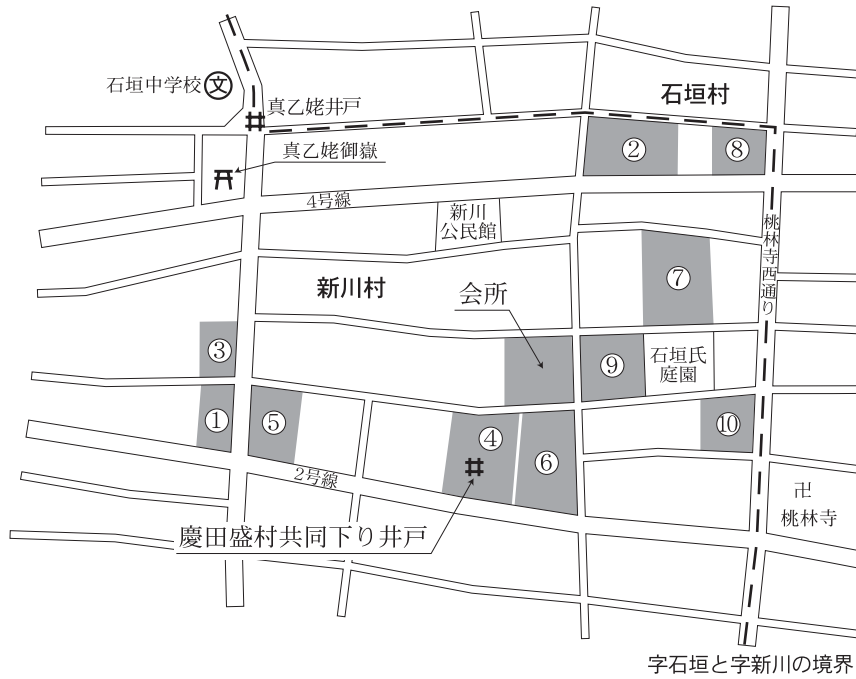
四力村の豊年祭に集まった旗頭

一、字新川出身の大阿母一覽表

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	7	5	4	3	代数
一八八二年	一八五一年	一八四三年	一八〇四年	一七七一年	一七三六〇	一七九五年	一七〇六年	一六七〇年	一六五二年	一六三八年	一六二〇年	一五七三〇	一五六六〇	西曆
光緒八	咸豐元年	道光二十三	嘉慶九	乾隆三十六	乾隆年間	乾隆年間	康熙四十五	康熙九	順治九	崇禎十一	万曆年間	万曆年間	嘉靖年間	中国年号
宇那利(一八三五―一九一五)	伊武津思(一八〇七―一八八二)	真比(一七七三―一八五一)	伊武津銘(一七五八―一八四五)	於那利思(一七三三―一八〇三)	伊武津思(一七〇六―一七七二)	伊嘉橋(一六八八―一七五四)	於那利思(一六七〇―一七五五)	宇那利(一六二九―一七〇七)	宇那利思(一六〇五―一六八六)	茂樽(一五九二―一六七八)	鍋山(生寿不詳)	真比(生寿不詳)	鍋山(生寿不詳)	人物
字新川二八六番地	字新川二九八番地	字新川二九八番地	字新川二九八番地	字新川二九一番地	字新川三一一番地	字新川五二番地	字新川五二番地	字新川三三番地	字新川二六四番地	字新川二九九番地	字新川五三番地一帯	字新川五三番地一帯	字新川五三番地一帯	元住所
山陽氏八世長丕の二女	山陽氏七世長矩の四女	山陽氏七世長矩の室	山陽氏六世長昭の継室	長栄氏十世真峯の長女	長栄氏十世真峯の室	嘉善氏八世永明の長女	嘉善氏八世永明の室	上官氏四世正繁の長女	嘉善氏五世永安の室	梅公姓大宗孫廣の母	憲章姓大宗英乘の長女	憲章姓大宗英乘の室	憲章姓大宗英乘の室	事項
山陽氏五世長京	山陽氏五世長岡	山陽氏五世長岡	山陽氏五世長岡	長栄氏九世信庸	長栄氏九世信庸	嘉善氏八世永明	嘉善氏八世永明	上官姓大宗正廟	嘉善氏五世永安	梅公姓大宗孫廣	憲章姓大宗英乘	憲章姓大宗英乘	憲章姓大宗英乘	出典家譜

夫・永明が病死のため、同一門の字石垣の七世西表永と再婚する。唐に漂流したので安南大阿母と呼ばれた。

字新川出身の大阿母の所在地



- 字石垣と字新川の境界
- ① 字新川53番地「憲章姓大宗英乗」の屋敷
3代大阿母鍋山の居住地、4代大阿母真比の嫁ぎ先、5代大阿母鍋山の出生地
 - ② 字新川299番地「梅公姓大宗孫廣」の屋敷
7代大阿母茂樽の嫁ぎ先
 - ③ 字新川264番地「嘉善氏五世永安小宗」の屋敷
9代大阿母宇那利思の嫁ぎ先
 - ④ 字新川33番地「上官姓大宗正廟」の屋敷
10代大阿母於那利の出生地
 - ⑤ 字新川52番地「嘉善氏八世永明小宗」の屋敷
11代大阿母於那利思の嫁ぎ先、12代大阿母伊嘉橋の出生地
 - ⑥ 字新川31番地「長栄氏九世信庸小宗」の屋敷
13代大阿母伊武津思の嫁ぎ先、14代大阿母於那利思の出生地
 - ⑦ 字新川291番地「山陽氏四世長延小宗」の屋敷
14代大阿母於那利思の嫁ぎ先
 - ⑧ 字新川298番地「山陽氏五世長岡小宗」の屋敷
15代大阿母伊武津銘の嫁ぎ先、16代大阿母真比の嫁ぎ先、17代大阿母伊武津思の出生地
 - ⑨ 字新川286番地「山陽氏五世長京小宗」の屋敷
17代大阿母伊武津思(伊武津)の嫁ぎ先、18代大阿母宇那利の出生地
 - ⑩ 字新川1番地一帯「毛裔氏三世安核小宗」の屋敷
6代大阿母比呂真、8代大阿母真比の出生地の可能性がある

真乙姥御嶽は、字新川の人々や山陽姓一門の人々から寄進を受けるなどかわりも多い。六世長邑小宗家（マイクンシナゴーヤ）字新川二九五番地（元住所）二代目の山陽氏七世宮良長盛（一七三八〜八七年）が、一七八四年に高那目差の役職に就いた際に拝殿を建立し、「真乙姥嶽」の扁額を寄進した。

郷土史家・牧野清著『八重山のお嶽』（一九〇年／あーまん企画）によると、一八七〇年、大史氏十一世富村高梢「七世高興小宗」が、平得目差の当時に寄進して真乙姥御嶽の拝殿を改築。一九一六年、字新川の人々が瓦葺きに改装したと述べている。

字新川村は一七五七年、字石垣村から分村し、同年に字大川村も字登野城村から分村した。字石垣村と字新川村との境界線は、桃林寺の西通りの道を北を行き、通称・横四号線の一段上の裏通りを西に行き、石垣中学校の校庭を通ってピロースク遺跡の東側を北に通っている。これらの境界は字新川のタープナーハカ、その西のキドウムリイハカの北側・上の村（マフタ、北域の小高い所）一帯は石垣村の御嶽である宮島御嶽や祭事との関わりの方が多いのでこの一帯をカニヌティーハカと命名して石垣村に残し、バンゾーガニ（番匠金）の形にして分離したことが推察される。

親村（字石垣・字登野城）同士、子村（字新川・字大川）同士はそれぞれを兄弟村だと言われている。しかし、字新川の真乙姥御嶽を中心に前方の喜田盛遺跡（慶田盛村の一部）、後方にピロースク遺跡、東にカニヌティーハカ遺跡、西方の川花一帯の川花第一・川花第二・川花第三遺跡、カフムリイ遺跡、竿若東遺跡などに中世のスク時代の遺跡が連綿と点在する。これらの遺跡は、山陽姓大宗長光（一五八四〜一六六一年）の祖先の那礼当一族らが居住し、統治していた美良底の村々であった。

ピロースク遺跡は十二世紀までさかのぼることができ、四力村（新川、石垣、大川、登野城）の発祥地の一つだったと推測できる。

「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」で、琉球王国に忠誠を誓って系持ちになった豪族たち（波照間島の明宇底獅子嘉殿 字新川二七番地 一帯。長興姓大宗善安 字新川六五番地。大史姓大宗高教。川平村の仲間満慶山 字新川五三番地 一帯。憲章姓大宗英乘 字新川四〇番地。嘉善姓大宗永展。美良底村の那礼当 字新川二八五番地 一帯。山陽姓大宗長光）らの屋敷は、字新川地の慶田盛村一帯に所在していた。

十七世紀中頃までに慶田盛村 字新川から停船できる津口（港）を求めて、東方の現在の字登野城（字登野城二〇九番地 長興姓大宗古見首里大屋子善安。字登野城三番地 嘉善氏五世で二男の宮良親雲上永將。三男の宮良親雲上永弘）、字大川（字大川二九七番地 憲章氏三世で三男の嘉平首里大屋子英種。字大川二八七番地 本家の四世大浜親雲上英森。字大川二九番地 嘉善氏五世で六男の宮良與人永定。字大川一五三番地 大史氏五世宮良高満）、字石垣（字石垣三三番地 山陽姓大宗宮良親雲上長光。字石垣二九〇番地 憲章氏三世で二男の大浜與人英政。字石垣九九番地 四男の登野城與人英仁）などへ移住している。

新川村が石垣村から分村する以前の十六世紀から十七世紀頃、登野城村や石垣村の中心地がこの字新川地の慶田盛村（喜田盛遺跡）や真乙姥御嶽一帯であり、当時栄えていて元村であったことが推測できる。

現在でも旧暦の六月は、四力村の発祥地の一つだった美良底の村々の中心で、真乙姥御嶽の神前に五穀の豊かな実りを感じ、来夏の豊穰を祈願する四力村の豊年祭（プール）の初日は、フーバナアギ（初穂上げ）であり、二日の真乙姥御嶽での村スルイ（集まり）のユニニンガイ（世又願い）が行われた。近年になって初日をオンプール、またはオンプリー、二日目个村プール、またはムラプリーなどと言っている。

八重山学研究の父・喜舎場永珣氏は、古謡「慶田盛ヌクンチエーマユンタ」の解説で慶田盛村の共同下り井戸は、新川集落の豊年祭や九月九日の重陽の節句などに、この水を神前に供進する風習があると述べている。大阿母の多くが

真乙姥御嶽一帯や慶田盛村の出身者なので、真乙姥とかかわりのある大阿母が四力村の豊年祭においても、重要な役割を果たしていたと思われる。

四力村の豊年祭（プール）が、いつ頃から始まったかは不明である。郷土史家・喜舎場永珣氏の『八重山古謡（上）』（一九七〇年／沖縄タイムス社）に豊作・豊穰・完納と真乙姥をたたえる古謡「真乙姥ユンタ」（石垣）の原歌、訳、解説が載せられている。次はその引用である。

真乙姥ユンタ（石垣）

原歌

- 一 真乙姥ヌ イラマリ
イジャル姥ヌ マヌクリ
- 二 ミドウムシャル ミドウム
ウナグシャル ウナグヌ
- 三 沖縄路バ シラビヨウリ
美御前路バ アキトウシ
- 四 シラビアル 路カラ
明キティアル 路カラ
- 五 按司添ユ 拝ミナ
天添ユ 拝ミナ

訳

- 真乙姥なる女性は 至って幸福な生まれであった
イジャル姥（真乙姥の対語）女は 真に幸運な素生でした
女性中の 女性のうちで
婦女子（原文は「婦女史」中の 婦女のうちで
沖縄への海路を はじめて開通された
首里王庁への航海をば 女性として始められた
開通された 海路から
沖縄航路への 海路から
国王様を 拝謁の光栄のために
天添（国王の対語）様へ 謁見の光栄に上国された

- 六 前又ピヤニ 拜ガミ
ユスジピヤニ 拜ガミ
- 七 バンシイディル タキダラ
羽ムイル タキダラ
- 八 拜ミディカラ ムドウラ
シイディティカラ シイドウガイ
- 九 バン八重山 帰り行キ
下八重山 下ダリ行キ
- 十 按司添又 御果報ヤ
天添又 ミカフヤ
- 十一 昼ヤ真頂 カメドウシ
夜ヤ真胸ニ ウキ通ウシ
- 十二 百十世又 御願
百歳世又 御願
- 十三 我島世バ ナオラシ
来夏世バ 実キラシ
- 十四 八重山三コウナ 荷積ンチイケ
中盛シ 上シヤギラ

前の南殿において 拜謁の光榮に洛し奉り
北殿に移つて国王に 拜謁の光榮に洛し奉り
妾はただいま生まれ替わつたほど 喜ばしく
羽があつたら空に飛翔するほど 嬉しくて譬えるにものがない位です
国王や王妃様の拜謁の式を終えたから 帰省しましょう
有難く拜謁してから 皇恩に浴してから帰郷いたします
真乙姥女が八重山に 帰省して行き
下八重山（八重山の対語）に 下島して行って
国王様の 聖寿の万歳と
首里王庁の安泰と 御果報ばかりあるように
昼は頭の頂上に 頂いて祈願し
夜は真胸の上に 合掌（原文は「合掌」）して祈願します
百二十歳までの長寿を 寿ほぎ奉り
長寿をば 寿ほぎ奉る
我が八重山の豊作をも 稔らして
来年六月の収穫時に 豊穰で国王への貢納も
八重山の公用船三隻に 満載し
公用船の中央に満載して 完納いたします

チヨウガ節

原歌

- 一 願フダスヌ 御蔭に
 ピイキバー(チラシ)
- 二 手摺ダスヌ ミブギンニ
- 三 嘉例吉バ 取り付ケ
 ビギリヤマハ 迎ヒヨウリ
- 四 思フダコトウ 叶シヨウリ
 願フダクトウ シイナシヨウリ
- 五 アツパレー アツパレー
- 六 古見又主 踊リヨウリ主又前

訳

神に祈願した神司たちの お蔭で
 手摺ダ(神司の対話)たちの祈願の ご恩誼によって
 目出度き旅への船も 帰郷して碇泊し
 船員として上沖した兄貴たちも 迎えて喜び
 思った事も全部 叶えて
 祈願した事も全部 意のままとなった
 噫! まことに偉い 噫! まことに偉い
 「古見又主」は兄の長田古見大首里大屋子よ 舞踊りなされ頭主よ

解説

この「真乙姥ユンタ」は四百六十余年前に真乙姥が上国の王命をうけて上国した時に、お庭前で謡われた「コイニヤ」と大同小異なユンタである。四百六十余年間には伝承の時に少しずつ忘れたところは、すげかえられたり脱句したりしてきて「コイニヤ」がユンタ体になってきている。

大阿母の多くが真乙姥御嶽一帯の出身であることや、「真乙姥ユンタ」の中に「我島世バ ナオラシ 来夏世バ 実キラシ」「八重山ニユウナ 荷積ンチイケ 中盛シ 上シヤギラ」と歌われたように、一五〇〇年「オヤケアカハチ・

ホンカワラの乱」後に、分村前の中心地の慶田盛村（慶田盛村共同下り井戸、会所）一帯で、農作物の豊作や琉球国王への貢納の喜び、豊年祭が行われていたと推察できる。

真乙姥の墓が、のちに「お願所」になり、豊年祭は真乙姥御嶽で行われるようになったと考えられる。現在のような豊年祭の形態をとるようになったことについて、字新川の長老・入嵩西清佐氏（一九一六年生まれ）は「八寿を迎えて―新川村と共に」（二〇〇一年／自費出版）で、与那覇在番一七七八年から一七八〇年の頃であるといわれている」と述べている。八重山は明和の大津波（一七七一年）で人口二万八千九百九十二人のうち九千三百十三人が溺死、八力村が流壊。その後大飢饉、疫病などが流行していた。

喜舎場氏は『八重山民謡誌』（一九六七年／沖縄タイムス社）で「一七七八年、与那覇親雲上朝起（首里、向氏）は八重山に在番頭として赴任し農業の復興計画を立て、精魂を打ちこみ計画を遂行し、すべてを失った人々には同情し税を免除するなどの善政を行ったので与那覇主と呼ばれて慕われている。また、津波後の八重山の人々は天災の再襲を恐れ動揺し、荒廃していく。赴任してきた与那覇主は精神の安定が第一であると考え、野外に出て大浜地方から石垣地方の多くの農民たちと接し激励した。また字新川のヤシイタカ原、俗にズク原（このズク原の東方を与那覇野と称している）に原小屋を建てさせ、午後の原小屋での休息中は各集落の篤農家を集めて懇談したりして人心を鎮めた」という内容を述べている。

その点から、八重山の復興に住民が心を一つにし、豊作に感謝し来年の豊穰を祈願する豊年祭が、真乙姥御嶽の神前で行われたことと考えられる。

喜舎場氏は、この与那覇主の厚恩に感謝してお初米を心から納めたという美談に基づき、大浜善繁（一七六一―一八一四年）がその高德をたたえて作詞、作曲したのが「与那覇節」であるとす。『八重山民謡誌』（一九六七年／沖縄夕

イムス社)に「与那覇節」の原歌、訳が記載されている。次はその引用である。

与那覇節

原歌

- 一、与那覇主又 御蔭ニ
主又前又 ミフギンニ
- 二、昔世バ タボウラレ
神又世バ タボウラレ
- 三、主又前ユ 仰ギ
百果報ドウ テイズル
- 四、百年世又 御願
百歳世又 御願
- 五、五日マアリ 十日越ヌ
夜雨バ タボウラレ

訳

- 与那覇在番の 御蔭さまで
在番御役人の 御恩恵によって
豊年の世を 恵まれた
神の治世を 給わった
与那覇在番を 仰ぎ奉り
百果報をば 合掌して
百年までも豊穡の世を お願いし
百歳までも黄金の世を 御祈願し
五日の風 十日越しの
夜雨をば 給はられるように

喜舎場氏は「布晒節」の註で、「新川村の布晒節は、大浜善繁氏が蔵元の脇筆者勤務中に、新川村から選ばれて作歌作曲したと伝えられている。氏は頭髪が全部白髪であったので、ニツクネームとして白髪脇筆者、のちに白髪首里大屋子(シイサイ、シナバグ)と呼ばれていた。(略)彼は政治家でもあったが、音楽家でもあった上に、天才的な美術彫刻家

で明和の大津浪後、権現堂再建にあたって、その壁画、彫刻等に辣腕を振った」とし、「租納岳節」の註では「この偉人は新川村の人材であって、(略)新川部落の豊年祭の巻踊の創作者であると伝承されている」と記述している。

一九六八年に字新川会長の西表高佐翁は、新聞に掲載された「ふるさと字新川」の原稿の中で、字新川は豊年ならびに航海安全の霊所とされる長崎御嶽、真乙姥御嶽があるところからユヌ・ムトヌシマ(世の元鳥)と称され、新川村が石垣島の「シカ」の豊年祭行事の中心となった。また、字新川二七番地(元住所)のスムンヤー(下の屋敷 長興氏二世善方小宗家)の七代の長興氏八世大浜善繁が、字新川の豊年祭の巻踊(スナイ)を創作したと古老たちは伝えていと述べており、大浜善繁は、西表の租納岳節、新川布晒節、与那覇節などを作詞、作曲していたという内容を述べている。

スムンヤーの『長興氏二世善方小宗』家譜には「一七六一年生まれ、一七七五年大浜仁也、一七九〇年波照間村耕作筆者、一七九七年若文字、一八〇〇年真謝目差、一八〇四年脇筆者、一八〇五年脇目差、一八〇六年筑登之座敷・大筆者、一八〇七年大目差、一八〇八年平得与人、一八〇九年紋黄冠、一八一七年惣横目役、一八一四年西表首里大屋子に昇進し同年五四才で死去した」と記載されている。

また、五穀の種子の授受したマイル(詰め所)が、東方の大史氏六世波照間高政(一七一―一八二一年)小宗(神村家)、西方も岳昌氏五世黒島致信(一七三五―一八六六年)小宗家(黒島家)である。マイルの屋敷が波照間高政や黒島致信の両家に決まった経緯について考えたい。

ちなみに五穀とは、米、麦、粟、黍、豆の主要な穀物の五種類のことである。真乙姥御嶽の前で行われる五穀には、豆の代わりにイモ(アッコ)が入っている。五穀に「イモ」が入った理由は、一六九四年に慶田盛村住(現在の字新川六五番地)の大史氏五世西表首里大屋子高康(一六四九―一七二八年)が八重山で初めて「はんすいも」(諸又は甘藷)を伝え、イモは生活の主食糧となり、八重山の人口は増加をたどったので「アッコの主」として住民から慕われ

たためだと思われる。そのため、東方に八重山蔵元は「アッコンの主高康」の弟（五男）で大史氏五世運天筑登之高岡（一六六七～一七四一年）小宗家（山川家）の屋敷から隣接して西に分家した、字新川三〇四番地の六世波照間高政小宗家（神村家＝ウンティンヤー）の屋敷を構えさせてムイルに指定したと考えられる。

西方のムイルにある黒島致信の先祖は、字大浜の崎原御嶽のトゥニムトゥで近世期に入って系持ちになった岳昌姓大
宗致崇（生寿不詳）。崎原御嶽は八重山で初めてヒルクマイと幸地玉ガネが薩摩の坊津（鹿児島県川辺郡坊津）から鉄
製農具を伝え「農作の神」とされた御嶽である。「農作の神」を先祖に持つ中の岳昌氏四世与那国致泰小宗家から五世
黒島致信小宗家は枝分かれし、字新川二五六番地に屋敷を構えてムイルにしたと思われる。

登野城村の「旗頭本」の中に「乾隆四拾六年辛丑新川村綱挽加勢之時立初」と記載されている。一七八一年に新川村
の綱曳きの時に初めて旗頭を製作したようだ。

喜舎場永珣氏は「宇根家と真乙姥綱曳」（一九三四年八月一日『八重山民報』筆名は「喜舎場甘泉」）の新聞記載、
『石垣市史資料編近代6 新聞集成I』（一九九〇年三月発行）の中で アヒヤーマとは首里大屋子総横目与人目差等
の役人の妻に対する敬称語である。（中略）即ちアヒヤーマ綱（筆者注：実際はアヒヤーマ綱と呼んでいる）とは「貴婦
人の綱曳」といふのである と述べ、また「雨乞と綱曳」の見出しの中で 或年大雨乞の時アヒヤーマ（貴婦人）
の一人は真乙姥御嶽に参籠して祈願したが願意が神に通じなかつたのか一滴の滋雨さへもなかつたので途方に暮れた。
彼れ等は真乙姥井戸（一名ウーニ井戸）の釣瓶の縄をすり合せて東西一組に分れて「綱曳雨乞」をはじめたところが不
思議にも盆を覆へすやうな大雨が降り、豊年を迎えたのでその年の豊年祭からは立派な綱を仕立て、女綱をひき豊年を
乞ふ習俗となつて今に伝えられたと言ふ。男綱が西方の民家の前道路でひくわけは「水元」の神前で縄をひき五風十雨
を祈願する意からである と述べている。

字新川村の長老・入高西清佐氏（一九一六年生まれ）は『八寿を迎えて 新川村と共に』（二〇〇一年／自費出版）の中で、「新川村の豊年祭にいつ頃から旗頭が立てられるようになったかははっきりしない。ただ新川村に代々伝えられてきた『旗頭図』『旗頭本』『旗頭記』『旗頭本（仮題）』の四つの書があつて、その中の『旗頭図』に『乾隆五十一年丙午年九月廿五日猪狩之時仕立』と記録がある。乾隆五十一年（一七八六）年に猪狩の時に仕立てたというのであるが、ただしこれは旗のデザインであつて、旗頭そのものであるかどうかはわからない。次に古い記録としては『旗頭本』の中の『嘉慶拾五庚午年本遣之時好直シ』という記録である。嘉慶十五（一八一〇）年に、これまでの旗頭に手を加えて直したというのであるから、それ以前に旗頭があつた事になる。ただしこれは木遣り（材木を切り出して運ぶ事）の時の事であつて、豊年祭とのつながりは不明である」と述べている。

新川村の「旗頭本・旗頭図」には、明治以前の旗頭に「矢頭（ヤーカシラ）・田頭（ターカシラ）」の記載がなく、大正十二（一九二三）年に寸法の製作写、名称グシ、矢頭旗（請福）、名称フーバナ、田頭旗（祈豊）と記載されている。その時、新川村ではすでに旗頭に矢頭、田頭が登場していた。

また、新川村の豊年祭のスナイ（巻踊り）を創作した大浜善繁（一七六一―一八一四年）や、両家の五穀の種子を授受するマイル屋敷の居住者である波照間高政（一七一一―一八二二年）、黒島致信（一七三五―一八六六年）、真乙姥御嶽の拝殿を建立し扁額を寄進した宮良長盛（一七三八―一八七七年）らは、一七七八年に赴任した新在番与那霸親雲上朝起に仕えた人たちである。

アヒヤーマ綱が系持ちたちの貴婦人の綱曳きという意味であることや、新川村の「旗頭本・旗頭図」の書の中に、年代はまちまちだが「梅公氏新城与人、上官氏正演、長栄氏黒島仁也、長栄氏仲田仁也、山陽氏頭大濱親雲上、長興氏桴海村山筆者、山陽氏頭大濱親雲上長演、憲章氏」などの旗頭、または旗の製作や寄進者などのかかわりのある系持ちら

の名が記載されていることなどから推測して、与那覇在番や八重山蔵元の主導によって現在の豊年祭の形態をとるようになったと思われる。

笹森儀助・東喜望注『南嶋探験2』（一九八三年／平凡社）の「石垣島再訪」の一九八三年八月四日の項で「（略）午後五時、四ヶ村ノ豊年祭ヲ新川村真乙姥社前ニ教員一行ト見物ス。毎村各二個ノ山ヲ昇出シ、台上ニ仮面人ヲ乗セ、天神ヨリ五穀ヲ賜フニ擬ス。古式風韻ノ高雅ナル、一見欽望ニ堪ヘタリ。其他鎌躍・歙躍・綱引等アリ。小男女対ノ衣服、白赤ノ鉢巻、太鼓・ドラノ囃子、総テ古風ナリ。余等一行蔵元ノ御用棧敷ニ上ル。村吏ヨリ茶菓・酒肴ノ饗応アリ。（中略）午後七時三十分帰舎ス。（略）」と記載され、百十一年前の豊年祭は真乙姥御嶽の前で、五穀の種子の授受やスナイ（巻踊り）、綱引き等が行われている。

現在の四力村の豊年祭は、主として字新川で上の村（五町内）を中心にして行われている。今から約百年前はどつだつたのか考えたい。

明治四十三（一九一〇）年頃の「地籍簿」（『石垣市史八重山史料集3 豊川家文書』一九九七年／石垣市）の中の「字新川の地籍者」を抜き出すと、以前の各一門（門中）の名乗りをしている系持ち（ユカルピイトウ）、無系・農民（ブザ）、沖縄本島の寄留者、字新川以外の地籍者（主として字石垣）は次の通りである。

字新川の地籍者（一九一〇年）

	無系（平民）	系持ち	本島の寄留者	他字の地籍者	計
地籍者数	六八	一九四	八	一八	二八八
割合（％）	二三・六	六七・四	二・八	六・二	一〇〇

字新川の地籍者系持の名乗別一門表（一九一〇年）

各一門名	名乗名	地籍者数	割合(%)
山陽氏	「長」	五九	三〇・四
上官氏	「正」	二七	一三・九
長栄氏	「信」	六	三・〇
毛裔氏	「安」	二	一〇・八
大史氏	「高」	一八	九・三
長興氏	「善」	一七	八・八
梅公氏	「孫」	一四	七・二
嘉善氏	「永」	二	六・二
憲章氏	「英」	七	三・六
岳昌氏	「致」	四	二・一
錦芳氏	「用」	二	一・〇
楊秀氏	「昌」	二	一・〇
他一門		五	二・六
計		一九四	一〇〇%

それに伴い貨幣経済が浸透した。世替わりは、人々にさまざまな変化を強いることになった。字新川に住むかつての百九十四の地籍者（約六七%）の系持ちらにも大きな動揺が見られたと思われる。

約百年前、字新川の二百八十八の地籍者のうち、二百二十（約七六%）の大部分が平民（農民）以外の人々で構成されている。平民は六十八の地籍者（約二四%）という少数で、字新川が他の三力村を招きながらながら四力村の豊年祭を行うことは至難の技であると考えられる。

豊年祭は古謡「真乙姥ユンタ」に謡われているように、豊作に感謝し来年の豊穰を祈願することによって納税が円滑に完了できるようにと、琉球王国や八重山蔵元が積極的に音頭をとり、字新川の人々全員で豊年祭の祝いを行ったことが推察できる。また、かつて系持ちであった百九十四の地籍者のうち、山陽姓一門の人々が五十九の地籍者（約三〇%）で圧倒的に多く、真乙姥の末裔として真乙姥御嶽の豊年祭に貢献したことが推察される。

しかし、琉球処分によって一八八〇（明治十三）年に八重山島役所が蔵元構内に設置され、一八九六（同二十九）年に島庁と改められる。一八九七（同三十）年には、西塘以来三百七十三年続いてきた蔵元が廃止され、蔵元廃止によって頭以下の役人は解雇となった。一九〇三（同三十六）年に人頭税が廃止、地租条例及び国税徴収法が実施され、

これまで八重山蔵元の支援で字新川の人々が一丸となって取り組んできた豊年祭も、八重山蔵元の廃止で支援がなくなり、役職の解雇で多くの系持ちが失業した。そのために豊年祭にも変化がみられ、現在ある上の村の農民を中心にした豊年祭の形態が取られたと思われる。

一九一七年八月五日『先島新聞』の「四個の豊年祭」(一九八三年ノ石垣市史資料編近代4 新聞集成I)の記事の中で「去る七月三十一日四個の新川御嶽の前で穂利祭(豊年祭)を行った。そして此日余興の綱引があるので処々方々から老弱男女が蟻の様に出蒐て御嶽の前は人の山を築いた。午后三時頃になると西の方から旗頭が見えた。さうすると今迄暑さに慣れてた見物人が俄かに生気をしやしワヤヤ騒ぎ出した。見れば行列の真ツ先きに新川乙女が揃ひの紺緋に紅白の布で捲頭をし手に采配を持ち呉將軍の女兵みたいだ。夫れに続いて杵、鎌、鍬などを持った青年が立縞のそろひに白捲頭をし勇ましくやつて来て一同御嶽の前に整列し乙女の采配踊りとマキ踊りが始まる。其唄が節面白く優に床しく感じた。其おどりが済むと東西二道から翁媪が台に乗つて来て其儘媪が翁に五穀を貢ぐ式(筆者注・実際は翁が媪に五穀の種物を授ける)を行つて退く。と同時にエイヤーヤツシヨイの懸声がかゝると先づ乙女が綱引を済まし直ちに其綱を西方約一丁位ある処に持行くと胴揚をする。『蝶仙』が第一番に揚げられ其外ハイカつた者を撰び片ツ端から揚げられた。其次に武装をした者か二人来て薙刀と鎌との立合をした後青年の綱引となつた。流石血氣旺盛の者許りだから如何にも勇壯で活気躍るが如くで二回とも西方の勝利であつたけれどもホンノ形式ばかりで真剣の勝負でないから何んとなく物足りない心地がした。是より四ヶ各字の旗頭が勃然と動き出し青春の男女打混りヤツシヨイ ヤツシヨイの声も勇ましく諸処を練り廻はり夜に入つて目出度所謂るお祭さわぎが終りを告げたのである」と記載されている。

四カ村の豊年祭(プール)は、初日のフバナアギ(初穂上げ、現在はオンプール)と二日にユーンンガイ(世又願い、現在はムラプール)を両日にわたって行っている。

二、フバナアギ（初穂上げ、現在はオンプール）

フバナアギ（オンプール）は、初日は今年とれた収穫物への感謝を四力村の各村の御嶽（字登野城―夫川御嶽、字大川―大石垣御嶽、字石垣―宮鳥御嶽、字新川―長崎御嶽）で行われている。いつ頃からこれらの各村御嶽の神前でフバナアギ（初穂上げ）が行われたか不明である。

一七〇五年、八重山蔵元編集の『八重山島由来記』には、「天川御嶽・長崎御嶽・宮鳥御嶽」などが記されている。比嘉盛章『八重山嶋由来記―解説並びに語句解』（『南島第一輯・八重山特輯』／一九七六年再版／東京・八重山文化研究会）の「八重島嶽々名并同由来」の項に次のように記載されている。

宮鳥御嶽 神名 をれはな

石垣村

御いべ名 豊見たとらい

右嶽立始る由来は昔當島に村無定人間愚痴無道にして慈悲仁愛を不知所々陣場能所に家を作り戦争ふ事果もなく強力に任せ人の財産を奪取或打殺し力任せ弱者を下人に召仕を切神をも不敬然處其頃兄弟三人住居す其名一人はまたねましす一人はなたはつ一人は平川かわらと云またねましすは神信仰深き者在所は石城山と云所に居けるか明れは寅の日暁天にてまさしもとたいと申す御神またねましす妹に御乗移り宮鳥山と云所にて詫宣に切神そらと申は人間の父母人と申は神の子也神の子なれば諸人皆兄弟なり同兄弟として一向争戦のはてなく人の命を失ふ事如殺鳥獸是神慮に不叶汝能慈悲を以諸人を愛し正直正路を以神を敬ふへし行末守へし我栖此山と詫宣ありて神はあからせ給ふまたねましす神慮を拝み宮鳥山近き石垣に在所を立彌悲心を以兄弟妹を始め諸人を愛ける兄弟作物年々みのり満作せり神を敬ふ其驗

あり諸人を見次第々々に集て村と成り彌神を敬ふ也今の石垣登野城二ヶ村是也彼三兄弟拜み始め嶽と崇める故諸人も崇敬仕来るとなり

郷土史家・喜舎場永珣氏は『新訂増補 八重山歴史』（一九七五年／国書刊行会）の「第一節 宮島お嶽と登野城、石垣両村の創立伝説」の項のなかで次のように記している。

『遣老伝説』や『八重山島由来記』という古記録によると、八重山の原始時代は穴居生活をして、居所は定まらず人道は地を拂つて敬神の道を知らなかった。略奪争斗が絶えることなく殺伐な蛮行が多かった。これはひとり八重山だけでなく何処の国でも同じであった。ここに三人の兄弟があつて、姉を「またねまします」といふ、長男は「なたはつ」、次男は「平川（びさがー）かわら」といった。三人はいつも人道によつて垂範、身を持していたが、とりわけ「またねまします」女は敬神の念が厚く、老を敬い、弱を助けて仁愛の精神にとんでいた。「石城山（いしすくやま）」という大岩山に住んでいたが、ある寅の日を明方に靈光とともに「マサシモトタイ」といふ神が宮島山に出現して、またねまします女におつげがあつた。「神は人の父母であり、人は神の子である。人間はみな兄弟であるからお互に礼を守つて親愛和睦すべきであるのに、野獸のような蛮的行為ばかりしているのは神の心になわなない。ただお前一人は慈悲心をもつて世の人を愛し、信仰心の厚いのはまことに神の心にそつている。それでこれから神はこの山にあつてお前のために未長く守護神になるであらう」と。のりごとが終わると神は一陣の風とともに姿を消してしまった。またねまします女はこの神秘な神の詞に感激して拜所をそこに立てゝあがめ、兄弟の住家もこの山のほとりに建てゝひろく衆人を愛して教化につとめ兄弟仲よく働いたので五穀は豊作で家は富み栄えた。不作の年などは人はみな飢饉に苦しみをまぬがれなかつた

が、兄弟三人の作物だけには被害がなく五穀は満作であった。衆人はこのことが神の加護の賜ものであることを知り、その徳をしたつて四方から集まって来て住家をその周辺に建てた。これが今の石垣登野城両部落の始めであるという。この宮鳥お嶽の伝説はそのまゝ、村の発祥伝説である。

前出の比嘉盛章『八重山嶋由来記―解説並びに語句解』（『南島第一輯・八重山特輯』/一九七六年再版/東京・八重山文化研究会）の「八重山嶽々名并同由来」の項に次のように記載されている。

長崎御嶽 神名 神か根

石垣村

御いべ名 すぎやあかり

此嶽由来不知

天川御嶽 神名 天川はなさう

登野城村

御いべ名 あまいら本主

此嶽由来不相知

大石垣御嶽や真乙姥御嶽は、『八重山嶋由来記』に記録されていない。また、字大川の大石垣御嶽の境内からスク時代（十六世紀頃以前）の中国製の青磁、褐釉陶器や鉄滓が採集される。タルフワイというアンサン（安南＝現ベトナム）国からの渡来神とされ、八重山で初めて稲を伝えたと言われている。『八重山嶋由来記』に記載されたこれらの三御嶽

から八重山スク時代の十六世紀以前の中国製の貿易陶磁器（青磁・染付・褐釉陶器）などの遺物や定住した生活の痕跡が全く発見されていない。

以上のことから、その当時の琉球王国や八重山蔵元の主導により、村を三角形上にして南海岸に面した底辺の東端（岬）の天川御嶽（アーマーオン）を字登野城の村御嶽、西端（岬）の長崎御嶽（ナースクオン）を字新川の村御嶽にし、北・中央頂上の宮島御嶽（メートウルオン）を村の発祥地として字石垣の村御嶽、字大川地に先住し鍛冶職人だったタルフワイの墓・大石垣御嶽（ウシャギオン）を字大川の村御嶽にしたことが推察される。

初日のフバナアギは、各村の御嶽の神前に旗頭をささげながら、神前にお酒（グシ）、花米（ハナングミ）、初穂もち（フバナムツ）などが供えられ、初穂上げ（フバナアギ）の儀式を行う。ミシャグパーシイ（神酒囃子）を行い、字登野城、字大川、字石垣などでは獅子舞（シーシーパーシイ）・イリク太鼓・棒技・巻踊りなどの庭の芸能がなされ、棧敷舞台で舞踊などの奉納芸能が行われる。



「八重山群嶋嶺首部石垣島石垣港四箇村之図」(明治26年8月八日八重山島役所実地調査之図)法政大学沖繩文化研究所『沖繩八重山の研究』(相模書房)より

四カ村のフバナアギ(オンプール)



字新川(長崎御嶽)



字登野城(天川御嶽)



字石垣(宮鳥御嶽)



字大川(大石垣御嶽)



字石垣(宮鳥御嶽)

三、ユーンガイ（世又願い、現在はムラプール）

二日目のムラプールは、来年の豊作祈願で世願いとが、来夏世願い（クナツユーンガイ）と呼ばれている。当日のムラプール（村豊年祭）は、真乙姥御嶽の神前に字新川が字石垣、字大川、字登野城を招くという形式で祭祀が行われている。

字新川村の長老の入嵩西清佐氏（一九一六年生まれ）は『新川字会「豊年祭シンボジウム」より』新川のプール（豊年祭）『石垣市史のひろば第十六号、平成三年三月』で、次のような内容を述べている（要訳）。

二日目の午前十時頃から真乙姥御嶽でのフバナアギ（初穂上げ）、五穀豊穰を願う祝宴を済ませた長老（チョーロー）たちが長崎御嶽（ナースクオン）に到着するとスナイ（巻踊り）の奉納が行われる。午後一時頃からスナイニンジュは「矢頭（ヤーカシラ）」や「田頭（ターカシラ）」を先頭に真乙姥御嶽へ移動する。真乙姥御嶽の神前に奉納されるとスナイ（巻踊り）の奉納が次の順序で行われている。

司が神から授かった五穀の種子を保管する場所を印した一二人のシルシバタ（標旗）を先頭に、二二人の五穀（グク）の種子、次いで三水の主（ミスヌヌス）を意味する四名の婦人たち、四世持ち（ユームツ）で字新川正副会長、以前は祭祀担当の役者（ヤクシャ）のなかの四人の兄役（シジャヤク）と中役（ナカヤク）が務めた。五歴代字新川会長と七十才以上の男（以前は五十才以上の男）の長老（チョーロー）たちが「ヤーラヨー」を歌いながら続く。

続いて、六フナー星を歌に合わせて踊る婦人たちのザイ（麾）、七四十五才の婦人たちによる鼓（ツツン）、八稲スリ節に合わせて男の子四名による稻曆（イニスリ）、九女の子たちによるユラスマース（籠）、列の周辺をお米を俵にしての喜び表現した二人ずつのターラグムツ（俵持ち）やマスタティ（拵立て）が回りながら進む。

その後は、十六人で玄米を白米に仕上げる動作を表現したアブーン（杵）、十一荒れた田んぼの草払いを表現したガギ

バライ（鎌払い）、12 鎌で荒れた田んぼを払った後に耕す動作を表現した四人のターウツ（田打ち）、そばに地唄人（ズーウタニン）が付き添って歌い進む。

後の列は、13 プラ（ぼら吹き）、14 ションク（小鉦）、15 タイク（太鼓）、16 ドウラン（銅鑼）などと巻踊り（スナイ）の諸芸の奉納が行われる。

字新川のスナイ（巻踊り）が終わると、字大川、字石垣、字登野城などの各村の旗頭、入子太鼓や女性による集団での巻踊りが奉納される。

引き続き綱または耳寄（ミンユシ）は御嶽（オン）の真向かいを中心に東は神村家、西は黒島家の門前まで延びている。東方に、マイルの大史氏六世波照間仁也高政（一七二一〜八二年）小宗家（神村家）の屋敷の前に五穀（稻・粟・麦・キビ・イモ）の種子を入れた籠と旗（標旗の上部の三つの丸印は竈 かまど）であり、下の横一本線は水だという。人の生活に最低限必要な水と火を掲げたものであるうか）を持つ二名の稚児を伴う翁・神が担ぎ台に待機している。西方、マイルの岳昌氏五世黒島仁也致信（一七三五〜八六年）小宗家の屋敷の前道路に二名の稚児を伴う媼・カンツカサ（神司）が担ぎ台に乗り待機している。

それぞれ合図と同時に矢頭（ヤーカシラ）、田頭（ターカシラ）を先頭に真乙姥御嶽の中央部に相寄る。東台に乗る翁神は籠に入れた五穀の種子を稚児が持ち、西方の媼・カンツカサの稚児に受け渡しをする。その五穀種物授受の儀礼が終わるとパーンと鳴る爆竹音で双方の担ぎ台は素早く東西の詰所に退いて行く。

続いてアヒヤー綱の始まりである。その年に選ばれた棒（ブル）又キ人の果報女が、真乙姥御嶽の神前の司の前へ進み出て棒を受け、その棒を縦にして上下しながら「サーサーサー」の掛け声で神の庭を一巡してから雌綱と雄綱を重ねてブルを通す。棒又キ人の役が成就した喜びで綱の上に担ぎ上げ、廻りを村々から参集の女たちによるガリー（乱舞）

が熱狂的にくり広げられる。これが真乙姥御嶽でのハイライトである。

真乙姥御嶽でのしめくりは、拜殿（オナー）でツカサ、字新川の役員たちによるミシャグパーシィが行われる。その後、参集した人たちにより綱を少し西寄りに移し、若者のガーリが行われる。綱を移動した西の行事にも綱または耳寄がある。その綱の西端は真久田家であり、東端は高本家に至る。その両家から耳寄の担ぎ台が出るのである。

夕刻耳寄の時刻になると、東方より矢頭を先頭に武装した男が薙刀を持って大見得を切りつつ寄って来る。西方から田頭、担ぎ台には武装した男で、正真の鎌を打ち合わせながら相寄って戦うのである。薙刀の横払いに鎌は飛び上がった外し、勇壮な戦いは続く。担ぎ台の横からは松明（タイムツ）の燃えと煙で凄じさを増して行く。薙刀の男は武士で鎌の男は百姓といわれ、終わりには百姓が勝利となる。

演技が終わると担ぎ台は素早く退き、続いては誰でも参加できる綱曳きである。親村（字石垣・字登野城）が東、子村（字大川・字新川）は西とに分かれて棒入れは新川字会長の役目である。大綱が繋がれると東西に曳き合う。大綱曳き後は、各字の旗頭に灯がとまり、祭りの終わりは先陣を切って字登野城、続く兄弟村である字石垣の順で次々と去る。最後尾には字新川の矢頭が兄弟村の字大川の太石垣御嶽まで送って行く。以上は、新川在住で元字会長の山根慶子氏からの話を参考にした。

四カ村のユーンガイ（ムラプール）



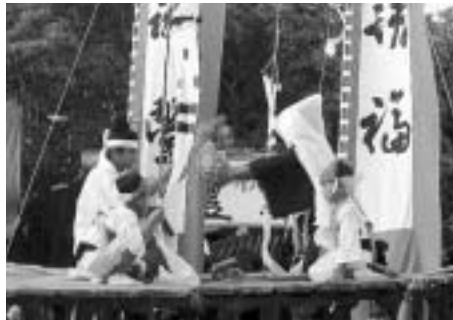
神前奉納に訪れたスナイニンジュ



真乙姥御嶽と旗頭



アヒャー網の後のガーリ



五穀の種子授けの儀



ツナヌミン